

漱石との密会

——その生き方から学ぶもの——

岸 山 睦

1. 漱石への個人的アプローチ

漱石に関する『学苑』への寄稿も今回で3回目となった。¹⁾ 一貫して英語学習者としての視点から漱石を論じてきた。第1回目は「漱石の無題の英詩をめぐって」という題で、従来の詩の解釈に焦点を合わせる研究とは異なるアプローチで、詩自体の評価を試みた。英詩は語学上の問題があるので英語関係者が研究するのが望ましい。漱石は、英語エッセイと比べると英詩を創作することは不得手であったのではないかと感じた。第2回目は「夏目漱石『夢十夜』の告白」という題で、悟れない漱石の心理を論じ、主として文体を考察し、『夢十夜』は文体的特徴から見て『文学論』からの実験的作品であろうという推論のもと、文体の多彩さに目を向けた。²⁾ さらに、第三夜目の内容にも注目した。暗い夜道で〈自分〉が背中に背負ったものは〈英文学〉に苦しみ、捨てるにも捨てられない自分ではなかったかとして、膨大な精力を英語に費やした、漱石の心を慮った。漱石の英語に向かう姿勢が作品のテーマにまで及んだ論を展開した。漱石の傑作は『夢十夜』であるという確信は今も変わらない。

第3回目である今回のタイトルについてお断りしておきたいのだが、ここでは漱石の専門家でもないのに、こっそり漱石を読んで魅せられてしまう心根を〈密会〉と表現した。しかし本稿もあくまで、ある英語学習者という視点からの論考である。漱石の作品や文体にも興味があるが、むしろ漱石の〈ありよう〉に興味ひかれることが多い。そこで、〈その生き方から学ぶもの〉と副題をつけ、漱石の生き方から学ぶべきものを考察してみた。

明治という激動の時代に官命を受け、英国留学を終え、日本に自分の力をどのように還元するのかに腐心した人物は、漱石一人ではない。しかし漱石は洋学の隊長としての心意気があり、その心意気こそ現代の我々が受け継がなくてはならないものであると思われる。実際その意志を受け継いだ弟子たちは、多方面にわたっている。弟子でなくとも漱石を読み、感化されている人はかなりの数に上る。ここにいわば、社会教育の原点がある。天才は分野を超えて国全体に影響を与えるものである。

かつては漱石ほどうるわしい存在はない、と考えた英語教師も多かった。それは人間としての〈ありよう〉が優れていたためである。漱石を目標にする人もいた。漱石は東大で英文学を講じていた頃、チョーサーからメレディスまでの広い領域を扱い、彼は日本の英学研究の先駆けとなっていた。日本での英文学史のテキストもない時代であったので実際に原典にあたり、評価し、講義することが、如何に大変であったかは察するに余りある。³⁾ 当時の英語に対する認識は今とは大きく違っている。英語のツール化を掲げている現代とは違い、教養重視の時代だったからである。教養を軽視して、語学は成り立たない。外国人が英語を英語の枠組みの中で学習すると、間違った言語観が形成される可能性がある。英語は総合学であり、コンテンツが必要なのである。

英語を学んだ人間にとって、英語を教えることのみがその道ではない。漱石の苦悩も実は、そこにあった。さらに、自分では教師には向いていないと考えていたようだ。にもかかわらず漱石門下から多くの逸材が育った。それはとりもおさず漱石が本物の教師であったことを物語っている。寺田寅彦、鈴木三重吉、森田草平、小宮豊隆、野上豊一郎、和辻哲郎、内田百閒、武者小路実篤、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛など錚々たる人々が漱石を慕って集まった。彼らは共に語り合い、そして学び合ったのである。今日の我々にも、このような分野を超えてのサロンのような語り合いや議論の場の必要性を感じる。

* *

漱石人気の秘密は、モチーフの若々しさにある。『夢十夜』にあるような、悟れないというモチーフは、『それから』や『こころ』といった作品群でたどれる輪郭、つまり〈愛の余情〉と関連し、容易には解決できない性質をもっている。最後の作品『明暗』に至るまで、漱石は三角関係に執着しながらも結局解答を見いだすことができなかった。しかし、そこが漱石文学の物語の構造であり、演出でもある。

愛は永遠のテーマであり、解けない謎である。時と場所は違うが、トルストイはアンナ・カレーナを自殺させることで、不倫の解決を見た。一方『明暗』の津田は温泉宿でかつての恋人との再会を期待しているのである。最後まで悟れない。図らずも未完成となってしまったが、物語は愛の不可思議さに帰結する。漱石は、悟れない愛にこそ深い意味づけをしたことになる。

2. 英文学研究と文学創造の関係

かつて漱石は友人の米山保三郎から、「日本でどんなに腕をふるったって、セント・ポール大聖堂のような建築を天下後世に残すことは出来ない」といわれ、建築家志望を取り消したという。⁴⁾ その後漱石は英文学に専心することになる。高みを目指す人間は自らの得意分野で頭角を現そうとする。

漱石の偉大さは日本人にとっての英語研究を、受身の研究に終わらせずに、自らの文学を創成する際の理論の要とした点である。ゆえに日本人にとって、ロールモデルとしての漱石を考え、洋学が彼の人生にどのような意義をもったのかを考えることは重要である。寡聞にして「伝記学」のような学問の存在は知らないが、漱石の文学はある種、読者を高めてくれる教養的要素があり、英語教師漱石と作品が密接に結びついている。さらに、その魅力は〈誠実さ〉という一条の光であろうか。それはどんな逆境にあっても、たとえ自分が損をしても、人に笑われても人生としっかり向かい合う哲学である。ユーモアを前面に出した『坊っちゃん』は、結局その哲学上にある。

また、研究姿勢も重要である。彼が留学して獲得したものは〈自己本位〉の哲学だった。そして、それは良くも悪しくも英文学との出会い、言葉を過激に使えば、衝突による。彼は英文学研究により〈自己改革〉を成し遂げ、ひいては日本の文学を近代に導いたのである。英文学をはじめ西洋の文学を知ること、自分の文学創造にも自信がもてたと言ってもよい。西洋の文学というものは彼にとっては、自らの文学への試金石のようなものであった。つまり、日本文学のテーマを探すためにも、西洋の文学を研究しなければならないのである。

英語研究とは、学習者の志に根ざす〈総合学〉である。文法と語彙を研究するだけでは十分ではない。言語にとっては、常に伝達すべき内容が大切であり、その演出にあるものが教養というスパイス

なのである。漱石から学べるものは文学のみではない。西洋の雑学的な楽しさや思想も学べる。漱石は、『吾輩は猫である』において、次のようなユーモアを展開する。絵がうまく描けない〈主人〉に、〈美学者〉はアンドレア・デル・サルトからの、それらしい助言を与える。そしてその後その忠告に従って〈主人〉は上手く描けたと礼を言うが、それに対して、

「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を搔く。「何が」と主人はまだ偽はられた事に気がつかない。「何がって君の頻りに感服して居るアンドレア、デル、サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに真面目に信じ様とは思はなかつたハ、ハ、ハ」と大喜悦の体である。(第一巻 p. 19-20)

自身も含めたインテリを嘲弄し、滑稽さが前面に出ていて、何度読んでも愉快である。かつて明治の文学者たちは外国語から多くを学んだ。坪内逍遙や二葉亭四迷の翻訳は近代の日本語に大きな影響を与えた。新渡戸稲造、岡倉天心も英語を学びながら、常に英語を使うことで自らを高めたといえるが、漱石は西洋の知識をユーモラスに展開することを楽しんだ。

漱石と新渡戸の違いは、漱石は英語を道具と考えていなかったことになるのかもしれない。新渡戸は英文著作の他アメリカで多くの講演を英語で行っており、英語を実用的な道具とみなしていた。岡倉天心も多くの英文の著作がある。

漱石は英語の達人ながら、英語によるアウトプットは極端に少ない。英詩とエッセイ程度である。渡英前には英国人も驚くほどのエッセイを書いたが、帰国後に書かれた詩は凡庸なものであった。漱石は自らの英語での発信よりも、英文学に通暁することでそれを自分の文学に生かし、そこから彼独自の文学観と世界観を創生していったのである。英語でエッセイや文学作品を発信してゆくか、それとも日本語で文学を書くかは大きな決断であったと思われる。

漱石自身は〈世界文学〉という野心もあったようであるが、自分の文学の翻訳には消極的であった。「私の書物なんか亜米利加人に読んでもらふやうなものは一つありません」と厨川辰夫宛ての手紙に書いている(第十五巻 p. 566)。謙虚さなのか、自分の文学は日本人のためだけに書かれたという意味なのか、分からない。文学を創る立場から言えば、自分の文学はまずもって正しく翻訳されるのであろうか、という疑いもあるかもしれない。

3. 語学教育との関係

現在英語教育は変革期にあり、今後は英語で授業をすることに主眼が置かれてゆく。しかし、一方、現場の混乱を予想する声もあがっている。⁵⁾ 筆者の基本的な立場は、「教養としての語学」の見直しである。実用のみにとらわれると語学教育は本来の目標を失ってしまう。たとえ構文は簡単でも、人生を考えさせる良い例文はあるが、教養なき英語教育は危うい、と言わざるを得ない。語学の達人に共通して見られるものがある。それは、モチベーションとともに〈教養の高さ〉である。

ここで一旦、目を漱石以外の文学者に転じてみたい。語学の達人は漱石以外にも森鷗外がいる。鷗外はナウマン博士とのドイツ紙(*Allgemeine Zeitung*)での論争が有名で、『舞姫』の主人公で自由にドイツ語をあやつる太田豊太郎は鷗外自身であったといわれる。その他、語学に努力した文学者は多い。例えば芥川龍之介も漱石同様、外国語を勉強することでその言語観を確立した。芥川自身の場合は場面設定を、主に日本にするという手法で自らの文学を構築した。彼の『地獄変』は、耽美主義を押し進めて自分の人生を破壊する人間の究極の選択を描いているが、その美意識の高さは、外国語、

古文、漢籍の教養によって支えられていたことは周知の事実である。

その他、現在でも三島由紀夫の英語力の高さと余裕は、YouTubeですぐさま見ることができる。⁶⁾ 三島はインターナショナルになるためにはナショナルにならなくてはならないとの理念があった。発音上の問題はあるが、自分の意見を堂々と言える度胸の良さはさすがである。彼も西洋を学びながら、そこに〈揺り戻し〉のような力が加わり、文学創生への道を歩んだように思われる。彼は外国語を学ぶことが目標ではなく、そこからもう一步踏み出して、自ら発信することを外国語学習の〈意義〉と捉えていたようである。そこには三島独自のダンディズムが見られる。

今日、これだけ英語教育が発達し、方法論研究も進んでいるにもかかわらず、世界に向けて自分の意見を発表している日本人はまだまだ少ない。外国語学習は結局個人の努力とモチベーションによるが、それよりも何よりも英語教育の〈志〉を問題にする方がよいのではなからうか。方法論をいくら教えても、学習者に〈志〉がなければ、語学は身につかない。

* *

漱石と鷗外はすでに 2003 年に、日本の高校の教科書から消えるといわれていた。これには賛否両論があった。趣旨としては、「文学」よりも「文章教育」の方が有益であるということであった。そして、漱石と鷗外を今後も教科書で扱うかどうかは議論の的となっていく。

文学軽視の態度は、言葉への「美意識」をなくすことである。言語に美意識がなくなれば、味気ない文章しか残らない。さらに大切なことは、文学には感性を育てる要素もある。文学は道德の教科書ではないから、失恋や自殺が出てきたりもする。『三四郎』『それから』『門』『こころ』には〈愛〉や〈死〉という重いテーマが出てくる。ということは国語の授業とは単に読み書きに留まらず、「人生とは何か」を考える問題意識なしには存在し得ない。

漱石や鷗外を文学者としてのみ扱うのではなく、外国語を極めた先人として見ればさらに多くのことが学べる。外国語を学んでどうなるのか、その先も見えるのである。小説の随所に見られる西洋の描写は、外国語を学ぶ者の憧憬をかきたて、刺激となり、さらには大きな励みとなる。著者自身の人生と作品が寄り添うときに、緊張感が生じ、良い作品が生まれる可能性が高い。

4. 教養というスパイス——和魂洋才への道

一体、作家が外国語に影響を受けるとはどのようなことであろうか。『三四郎』を読めば、読者は三四郎と一体になって学問の世界や青春のほろ苦さなどを感じ、同時に教養主義的な世界に同調することであろう。さらに、西洋の哲学や文学がちりばめられた個々の事象にときに引き寄せられ、小説をさらに格調高いものにしている美禰子の“stray sheep”や“Pity is akin to love”などのさりげない英語の細部表現にも感嘆しながら受容していく。

漱石という人は、多読によって文学的知識を広げ、なるべく英文学が扱わなかった人生の機微を作品としたように思われる。たとえば、シェイクスピアが『ロミオとジュリエット』や『マクベス』や『オセロー』などで扱わなかった〈愛〉と〈死〉の諸相を別の角度から、文学作品としている。

『三四郎』『それから』『こころ』などはその代表である。たとえば、三四郎の恋は余りにも淡く美禰子には伝わらなかったし、また伝える必要もなかった。それはシェイクスピアの文学にはない、違

った意味での恋愛観をもっている。しかし、それはまぎれもなく漱石が表現したかった〈愛〉の形態であった。また、『それから』の長井代助はかつての恋人で、すでに人妻となっていた三千代を再び愛してしまった。漱石はそのような独自の愛の形態を描く衝動に駆られていたといえる。

漱石にとっては、英文学は模倣の対象ではなく、自らの文学の強度を確かめるような研究課題であった。ゆえに、英文学というものを、文学を測る鑑のような位置づけとしたかったのではなかろうか。漱石は英文学に対する異物感や不安をずっともち続けていたようだ。それはある高みまでくると視界が開けるというようなものではなく、英文学に裏切られたという遺恨のような感情である。

漱石はイギリス留学から日本に帰ってきってから英詩を書いた。おそらく英語の余韻がまだ残っていたのであろう。そのテーマは『夢十夜』に引き継がれていった感がある。漱石の『夢十夜』は限りなく幻想的でなお文学的な〈美〉を追求した作品である。彼の文学には多くの人間の営みが入っている。そこでは人生の美しさや深さが独自の文章でつづられてゆく。一夜目の女の恋は不思議である。百年たってまた生まれ変わるという女の恋は、深く哀しい極美の世界である。彼のテーマは、男女の断ち切れない心をどう断ち切るかということを一歩離れた情の世界から考えている。シェイクスピアが愚者を描いているように漱石もまた愚者を好んで描いているように思われる。

また、『夢十夜』の第七夜は漱石の中にある東洋と西洋の根源的な〈隔たり〉を物語にしている。大きな船から飛び降りて自殺を図った男の心理が実に巧みに描かれている。たとえ西洋人ばかりの、何処へゆくか分からない船であっても、とりあえず、飛び降りて失敗したという後悔の念も描かれている。漱石は、ほんとうに英語を専攻して良かったのか、と自問自答しているように思われる。漱石にとっての〈東洋〉と〈西洋〉は生涯のテーマであった。漱石の素晴らしさは和魂洋才にあるが、やはり西洋にはどこかもどかしさを感じていた。だからといって夢の中の男のように西洋人が多くいる世界である船から飛び降りる訳にもいかない。

ここで有名な第六話、運慶の話を思い起してみよう。運慶が護国寺の山門で仁王像を彫っている。「自分」も群衆に混ざって運慶の仕事ぶりを見ている。そして運慶の天才ぶりに驚嘆するのである。ところが、若い男から、あれは運慶が彫っているのではない、最初から仁王像が木片に存在していて、運慶はそれを彫り出しているのに過ぎない、と言う。「自分」は嵐で倒れた檜の手頃なものを持ち帰り、何度か彫ってみるが、一向に仁王像は現れない。物語はここで終わるのである。真意はどこにあるのか。これは芸事一般に言われる、天才と凡人の違いを表していると考えられる。しかし、英語的視点に立つとこんな解釈も可能である。すなわち、ネイティブの鮮やかな英語はどこに存在しているのか、という問いである。それはすでにネイティブの精神に存在しているのである。もちろん、日本人には日本語の精神があり、ネイティブにはネイティブの精神がある。鮮やかな言語を表出する人間は、最初から心に刻まれている〈精神〉を単に外に表出するのではないか、という考えである。普遍文法で考えれば、ネイティブにはそれぞれ正しい文がもともと〈精神〉に埋め込まれているという視点もある。

* *

漱石が生きた時代はイギリスが産業革命の先頭を走りヨーロッパの中でも特に活気に満ちていた。イギリスは、ビクトリア朝からエドワード朝に移り、物質的進歩も目覚ましく、中でも鉄道を始めと

する交通網や通信の発達、文学と哲学、さらに美術もその成熟期を迎えていた。日本もそれに倣い、鉄道関係は主にイギリスから輸入したものである。それを取り巻く文化全般も華やかであった。文学も絢爛たる勢いを備えている。その原動力は文学者たちの〈使命感〉や〈美意識〉であり、そのような明治の大きなうねりを日本のルネッサンスと捉えることも可能である。その余熱は大正時代まで続いたといえる。ところが反面、日露戦争後に浮かれすぎる現状もあった。漱石の小説の端々に見られる戦争批判は浮かれすぎた、日本への警鐘という意味もあったようである。

日本文学は外国の学問や思想を吸収して大きく発展してきた。周辺には多くの学問の発達とそれを献身的に支える多くの人の努力があった。そこには日本語への反省と、見直しという精神活動が見られた。外国の文化を吸収する過程の中で、日本の欠点や素晴らしさを発見することもあった。しかし、一貫して当時のエリートを支えたものは向学心と使命感であった。彼らは外国の文化や言葉と格闘する情熱をもって、日本を豊かにしたのである。

5. 漱石の好きな読書——自己本位という啓発語

漱石が好きな作家はスチーブンソン、キプリング、スウィフト、メレディスなどであったが愛読書を聞かれると、漱石は困ったようである。つまり、多読と精読を同時に行ったからである。

若干の書を限つて之を提出すれば、予はそれのみを愛読して居るかと思はれると困るのである。書齋に積まれたる全部の英書を以て愛読書としたら、その方が公平かもしれぬ。英書許りでなく、希臘語の書も拉典語の書も、仏独の書からも、その好きなのを選つたら大変なものになる。(第十六巻 p. 733)

しかしながら、漱石が立派なところはもし作家を批評してくれと頼まれると全て人の評によらず、自分が読んだ感想が述べられることである。それが、〈自己本位〉ということにもつながっている。読書法については、多読を勧めている。

英語を修むる青年は、或程度まで修めたら辞書を引かないで無茶苦茶に英書を沢山と読むがよい。少し解らない節があつて其処は飛ばして読んでいってもドシ〜と読書してゆくと終には解るやうになる。(第十六巻 p. 522)

音読もよいが、周りに迷惑をかけるようでは困るとしている。漱石の外国語学習法はいまでも役に立つといえる。漱石はある意味で模倣を嫌い、外国文学をたくさん読むことで内容を咀嚼し吸収して、文学を創造していった。漱石は自己本位という考えで自らを救済することができた。さらにいえば、これがどれほど多くの文学者や英語研究者に自信を与えることとなったか分からない。

私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるといふより新らしく建設する為に、文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいふと、自己本位といふ四字を漸く考へて、其自己本位を立証する為に、科学的研究やら哲学的の思索に耽り出したのであります。(第十一巻 p. 444)

この文は読者を励ますと同時に、漱石自身も長年の懊悩から解放されたのではなからうか、と思われる。そしてそれによって、文学をより普遍的な学問として研究することに没頭することとなった。

6. 文学の総合力——多角的学問から生み出された文学

漱石は漢籍の教養を英語に生かした人であった。その異文化と格闘して、最終的に自分の使命として自分の作品を残し、後輩を育てるという偉業を成し得たのである。漱石はそのインスピレーションの源泉を漢籍と外国語の両方から得ている。しかし、西洋文学を模倣することなく、完全に日本に回帰することもなく、独自の道を歩んだ。あくまで自己本位を心の中心に置き、東洋と西洋の対立構造のなかであって自らは〈和魂洋才〉を心がけていた。コンテンツとしては当時の〈文明批評・社会批評〉を中心とした日本の行くべき道の模索であろう。

漱石は漢籍による文学基準があって、英語においてもその基準を当てはめた。ここに見る漱石の悲劇があるようでいて、実はそこが漱石の魅力となり読者を惹きつける。そして、究極的には〈美〉を探究したのである。言語にとっての〈美〉とは文体と内容とのバランスであり、文体が内容にどれほど切実に寄り添っているかである。漱石は内容によって文体を变幻自在に使い分けた作家でもあった。

* *

漱石の文学活動とは、諸学のエッセンスを自由に取捨選択しながら最終的には西洋と東洋の狭間で自己決定を行い、自らの信じることを書き残すことであった。一見、英詩は俳句や漢詩のように余技に見えるが、実際には漱石文学では大きな意味をもっている。深い喪失感や悲しみや恋心が表現されているのは英詩においてであるからだ。漱石は本音を英詩で語り、永遠の女性を英詩で謳った。そしてそこには「夢十夜」の一夜目の女性へのテーマの継続性が考えられ、漱石の本音がうかがえるのである。イギリスから帰った漱石はしばらく英語の余熱に侵された状態であった。そこで英詩を書いたのであるが、イギリス文学の巨星たちには及ばないことを考えて、母語による作品作りに心血を注いだのではなかろうか。

漱石を理解する場合、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』を中心に理解する人は多いが、それは読者の年相応の理解ということである。漱石の青春ものを再読すると、一度青春に戻ったような感激が味わえる。そんな中で、『夢十夜』には漱石文学の根源的テーマが含まれていて異質である。全編を貫く〈悟り〉や〈死〉という概念。それは漱石の文学作品を形成してゆくうえで重要な個性となり、テーマを深めてゆく。〈悟り〉は覚醒であり、〈死〉はより良き生を生きるための鑑であると考えられるからである。

漱石の豊かな語学研究の収穫を思うと、英語がしゃべれることのみがよいのではない。英語を勉強して様々な方向に向かうのもまた一選択肢としてあってよいことが分かる。英語研究は人に多くのインスピレーションまでも与えてくれる。母語を反省することもあるし、英語の至らなさを実感することもある。英語研究は4技能にのみ収束するものではない。むしろ〈言葉〉という豊かな世界は、常に広い教養を与えてくれるのである。漱石の文学とは教養主義に貫かれている。たしかに思想やスノビズムを背景とするが、ひたすらに、高い教養的雑学の世界を展開する。漱石は日本文学において英語の知識がある種のスパイスになるという精妙な効果を熟知していた。

漱石は日本の誇るべき教養人であり思想家である。漱石は英語によって感性を磨き、もって革命的

な文学を創造したといえる。漱石は、比喩として言えば日本の近代化における国家装置として機能したとも考えられる。「個」として語学という壁に立ち向かうことで、憂鬱にも力強く対峙し、日本の近代文学の礎を築いたのである。

7. 漱石人気の構造

すべての芸術は美意識の追求である。音楽は音楽の美意識があろうし、絵画には絵画なりの美意識があろう。漱石をロマン主義という視点から眺めると、英詩、『夢十夜』、『こころ』、『明暗』と大きな輪郭が描ける。そこには常に〈愛の余情〉がある。漱石が多くの人に読まれている理由の一つは、終わらない青春を抱えているからであろう。『こころ』にこんな箇所がある。

私の理屈は其人の前に全く用を為さない程動きませんでした。私は其人に対して、殆んど信仰に近い愛を有つてゐたのです。私が宗教だけに用ひる此言葉を、若い女に応用するのを見て、貴女は変に思ふかも知れませんが、私は今でも固く信じてゐるのです。本当の愛は宗教心とさふ違つたものでないといふ事を固く信じてゐるのです。私は御嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるやうな心持がしました。御嬢さんの事を考へると、気高い気分がすぐ自分に乗り移つて来るやうに思ひました。もし愛といふ不可思議なものに両端があつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いてゐるとすれば、私の愛はたしかに其高い極点を捕まへたものです。(第六巻 p. 183)

漱石はほとんどストイックな恋愛にこだわった。そして、真の恋愛とは何か、を問い続けたのである。これは〈問いかけ〉であるがゆえに、物語に解決はなく、漱石は読み継がれることになる。漱石文学の特徴は〈問いかけ〉はするが、答えは分からないところにある。青春の愚かさと美しさという普遍的課題が存在する。ストーリーそのものが目立つ芥川龍之介とは違っている。川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫といった日本の美意識を探究した作家とも違っている。漱石のうるわしさは、悟れない人間への愛おしさを描いた点にあるのではなからうか。シェイクスピアが愚者を愛したように、漱石は悟れない人間を愛したに違いない。

漱石のいまひとつの魅力は、生き方そのものに強いドラマ性があったことである。そこには〈貴種流離譚〉にも似た生き方のメッセージがある。それは、当時としては難しかった英国留学を果たし、東大で英語を教え、そして博識な人間がユーモアたっぷりの小説をもって文壇に登場する、その多彩さである。『坊っちゃん』には、PCの観点からすると差別用語はかなり出てくるが、それらは当時の言葉の使用例として認めるしかない。PCも行き過ぎると言葉狩りとなり、表現の自由を奪うことになる。しかも過去にまで遡及することは問題である。漱石の文学作品は、文字表記方法を現代になおせば、そのまま国語の教科書で使えるほど、現代性を備えている。

恋愛というテーマはすでに今後も読み継がれる構造をもっている。正面から教養を打ち出し、西洋文学を超越しようとするスタンスは頼もしくあり、青春の切なくも、終わらないテーマには、時代を超えて読者を引き付ける魅力がある。つまり恋愛の悲劇はながく語り継がれる〈引き寄せ〉の構造をもっているのである。

※本文中の引用は『漱石全集』(1965-67 岩波書店)に拠る。漢字は新字体に改め、ルビは省略した。

註

- 1) 「漱石の無題の英詩をめぐって―〈愛〉と〈葛藤〉の素描―」『学苑』(816号 p. 54-63), 「夏目漱石『夢十夜』の告白―第三夜と第五夜を中心に―」『学苑』(841号 p. 25-37)の2論文である。
- 2) 漱石にとって文学を研究するとはどのようなことなのか。彼の文学観を端的に表したものが『夢十夜』であると考えられる。それはレトリックを実験的に使った習作であったのかもしれない。物語の仕掛けとしては、クライマックスを最後にもってきて謎をかける。謎は読者が解かなくてはならない。それゆえ、議論の余地が残るのである。

漱石を読んでいると『文学論』中の(F+f)という公式が思い出される。すべての文学には主題(Focus)と感情(feeling)があり、それは、俳句から小品、小説に至るまで一貫して流れているように思われる。漱石がこれを使ったのも、彼の目指したものはまずは方法論の確立であったからである。谷崎潤一郎にも文章論があって、一部漱石と重なる点があるが、漱石と違ってわかりやすい。それは文章を書く人間にとっての〈種明かし〉のようなもので、文章をどう書けばよいか分からない人へのアドバイスである。しかし、漱石の場合はもう一段高い、研究者や作家にとっての文章論であり、読み方への指南書である。すでに『文学論』については過去に膨大な研究があり、2012年にも『文学』において“漱石『文学論』をひらく”と題して優れた特集が組まれている。
- 3) 福原麟太郎『夏目漱石』(荒竹出版) p. 73 参照。また、「英語教師の挑戦」(p. 105-119)と題して多くの英語教師が漱石から刺激を受けていることが描かれている。重要な思想背景の一つに〈英語教師への挑発〉があるのではないかとと思われる。かくして漱石の自虐的側面は、多くの英語教師が共感を抱くところとなる。漱石に関する著作や論文を残している英文関係の学者には、福原麟太郎のみならず、荒正人、柄谷行人、丸谷才一、出口保夫などがいる。
- 4) 恒松郁生『牧野義雄のロンドン』(雄山閣) p. 14 による。
- 5) 北海道教育大学の宇田川拓雄教授によって、英語による授業は困難であることが提示されている。学生の現状を考えると、学生にとっても教師にとってもまず、英語力強化の仕組み作りからはじめなくてはならないという(“日本経済新聞” 2011年10月24日朝刊)。
- 6) 最終確認日、平成25年10月6日“1969年、カナダのテレビ局による、三島由紀夫の貴重なインタビュー”(www.youtube.com/watch?v=hkM_1LX4hDI)。

参考文献

『漱石全集』1965-1967 東京: 岩波書店
荒正人『「夏目漱石」入門』1967 東京: 講談社現代新書
岸山睦『語学という生き方』2003 神奈川: 青山社
ダミアン・フラナガン『世界文学のスーパーstar夏目漱石』大野晶子訳 2007 東京: 講談社
恒松郁生『牧野義雄のロンドン』2008 東京: 雄山閣
福原麟太郎『夏目漱石』1973 東京: 荒竹出版
『文学』“漱石『文学論』をひらく” 第13巻・第3号 2012 東京: 岩波書店

(きしやま むつみ ビジネスデザイン学科・文化創造学科)